

昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(2) －神戸篇(前篇)－

著者	福田 義昭
著者別名	FUKUDA Yoshiaki
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	129(308) - 108(329)
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008465/

昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(2)

——神戸篇(前篇)⁽¹⁾——

福田 義 昭

1. はじめに

筆者は前稿で、おもに昭和戦前・戦中期の東京や朝鮮を舞台とする日本の文学作品等において、それらの地に暮らす外国人ムスリムがどのように描かれてきたかを分析した⁽²⁾。その続篇である本稿では、神戸が舞台となった作品を対象に同様の分析を行う。ただし、紙幅の都合上、関連するすべての作家をあつかうことはできない。そこで、作品数が比較的多く、より本格的に取り上げるべき作家である陳舜臣(1924–2015)は「後篇」に回し、本「前篇」では、それ以外の作家を取り上げることとする。作品の時代設定は昭和戦前・戦中期から戦後にまでおよんでいるが、戦後の場合でも、戦前から日本に在住してきたオールド・カマーのムスリムが登場する例のみを取り上げている。これらの文学作品を読むことによって、「隣人」としてのムスリムが初めて日本社会に現われたころ、一般社会の民間人が彼らをどのように見ていたか、その一端を知ることができるだろう。無論、時代が下がったあとで書かれた作品の場合は、回顧的な意味づけがなされている点にも注意を払いたい。

前稿と同じく、本稿は初期の在日ムスリム・コミュニティに関する研究の一環である。しかし同時に、在日外国人の文学的表象(広く言えば「他者表象」)の研究でもある。このような研究では、欧米人、ロシア人(とくに白系ロシア人)、そして中国人や朝鮮(韓国)人などが取り上げられることが多い。ムスリムが登場す

る作品は、おそらくほとんど知られていないだろう。だが、そうした作品が近代日本文学にないわけではない。本稿の目的には、今までほとんど顧みられなかった在日ムスリムの文学的表象をできるだけ多く例示・紹介することも含まれている。

2. 橋外男と稲垣足穂——中東・イスラム世界への幻想的な窓として

在日外国人コミュニティを考えるうえで神戸という都市が本当に重要だったのは、外国との主たる交通手段が船舶だった時代である。近代以降、神戸は阪神工業地帯を後背地としつつ、日本を代表する貿易港として繁栄した。もう一つの代表的貿易港である横浜港がアメリカ航路の起点となったのに対して、神戸港は欧州・アジアおよびアフリカとの結びつきがより強かった。こうした条件によって、昭和戦前期の神戸には当時の日本で最大のムスリム・コミュニティが形成されることになった。1935(昭和10)年には同地に日本初となるモスクも完成している⁽³⁾。したがって、外国人ムスリムが登場する文学作品を辿ってゆけば、東京とならんで神戸がよく出てくるのはごく自然なことと言える。

一国の玄関口たる港町では、長期在留者のみならず短期滞在者としての外国人の姿も目につく。橋外男(1894–1959)の『コンスタンチノープル(君府)』(1949)に出てくる「亞刺比亞ハドラマウトの教授で、イナベル・ベイと云ふ日本への一観光客」もそのような一時的滞在者で

ある。語り手は「太平洋戦争勃発前年の夏」に商用で神戸に赴きオリエンタル・ホテルに宿泊した際、この人物と知り合っている⁽⁴⁾。タイトルどおりこの物語はおもにオスマン帝国で展開する奇譚であり、そのかぎりでは本稿の対象とはならないが、話の種を語り手に提供したのが「イナベル・ベイ」という設定になっている。つまり、枠物語の枠に登場する人物である。作者は、直木賞受賞作「ナリン殿下への回想」(1938)など、エキゾチシズムあふれる伝奇小説、冒険小説等で知られる。戦中期は満洲で過ごした経験を持ち、同地やそれ以外の外国を舞台とした作品も多い。そうした作家が中東という異世界につながる窓として選んだのが港都神戸ということになるだろう。

同じように神戸が持つ異国情緒を活かした作品を書いた作家は数えきれないほどいる。だが、稲垣足穂(1900-77)ほど異彩を放った作家はほかにない。彼は、単なる異国情緒といった次元を超えて、独特の奇想幻想で神戸をいろうた作品を数多く発表し、この街を現実離れしたファンタジー空間へと変容せしめた。生まれたのは大阪市だったが、1907(明治40)年に明石に転居、1914(大正3)年には関西学院普通学部(翌年、改称して「中学部」)に入学し、1919(大正8)年に同学院を卒業するまで、近年言うところの「神戸モダニズム」や「阪神間モダニズム」文化のなかで育った。彼の作品から浮かび上がる神戸は、そのような環境によって育まれた夢というにふさわしい。

その足穂の夢が独特の雰囲気をもつ理由の一つに、そこに——たとえ西洋オリエンタリズム経由であるとしても——インドや中東・アフリカなどを想起させる要素がふんだんに取り入れられていることが挙げられる。とりわけ『千夜一夜物語(アラビアン・ナイト)』の影響は大きい⁽⁵⁾。たとえば、「海港奇聞」(1972)にこんな一節がある。

だれか、神戸港をこんな壇中につけてみ

ないか。もっとも閑静な兵庫村時代でないのだから、神戸市はアブストラクト風に仕上げてもいい。さてこの美術品をストーヴの棚やピアノの上に乗せるといのは、古風だ。ではどこへ飾ろうか。いっそ人間の体内に入れたらよかろう。即ち美女のヴァギナか、美少年のエイナスの内部へ収めるわけだ。そして覗きメガネで覗かせたら金儲けになる。この「人体神戸館」の内部にはもちろん、無数の灯が灯らねばならない。

僕だったら、BAGDAD:MAGIC CITY OF THE EASTと、お尻の入口に看板を掲げるであろう。そして何処からか賑やかな銅鑼と笛の音が聞えて、立ち並ぶミナレットやモスクの円蓋の上をバグダットの盗賊とお姫様が、こちらへ向って手を振りながら、飛行絨氈に乗って、三日月をかすめて通過する⁽⁶⁾。

足穂特有の模型嗜好や「A感覚とV感覚」に連なるモチーフまで組み込まれている。読み方によっては、神戸の街を、そのうそ臭さやキッチュさを含めてうまく戯画化したような一節とも言う。しかし、足穂の場合はそこに皮肉な意味合いすらない。彼は自作における神戸について、「イナガキタルホのかくやうな神戸はないかも知れない。だが、それは神戸に於て遊離されたるもの——神戸の幻想だ。これをのぞいて藝術家の職分はどこにあるといふのだらう?」⁽⁷⁾とか「作者がでっつけ上げた夢の街」⁽⁸⁾だとかいうふうに言い切っている。物語というより詩的イメージの文学であり、重たい歴史とは無縁のモダンで物質的な幻想空間を展開するには、開港以前の歴史にあまり見るべきものをもたず、近代の顔のみをもつ神戸の軽さこそうってつけだったのであろう。

代表作である幻想掌篇集『一千一秒物語』(1923)は、タイトルこそ『千夜一夜物語』のパロディになっているが、直接的に中東やイスラム世界を喚起する語句はほとんど用いていな

い⁽⁹⁾。描かれている場所も神戸を強く想起させるものの、実際に固有名詞は出てこない。完全な「夢の街」である。しかし、それと地続きにつながるような同質の空間が、「星を造る人」(1922)や「星を売る店」(1923)など数多くの作品で、神戸に実在する地名とともに描き出されている。そしてそこに「アラビヤナイト」「トルコの旗から三日月を切りぬいて……」(以上「星を造る人」)、「カイロの或る英國の商館」「トルコ人のバーで、隣席のアラビヤ人の間に……」「アラアの神」(以上「星を売る店」)など、はるか中東を呼び起こす語句が散りばめられるのである⁽¹⁰⁾。

とはいえ、イスラム世界にかかわる事物や名前がすべて遠い異世界やファンタジーに属するものかと言えば、そうでもない。神戸に実在したムスリムゆかりの事物も、さりげなく背景に書き込まれている。「星を造る人」に「或る夜、そんな探偵の一人が比較的人通りの少ないムサボーイの倉庫のかげに張番してゐると……」(47頁)とあったり、「緑蔭物語——エッセー風に」(1963)では「三日月を頂きにつけた塔がある回教寺院の前を、紫色の布をまとった印度の少女が、サンダルをはいて通る」という一節に出会ったりする⁽¹¹⁾。

しかしこの関連でさらに重要な作品は「新月抄」(1937)と題された短篇である⁽¹²⁾。この作品は三つの部分から構成されている。タイトルにある「新月」(三日月)は足穂文学のキーワードの一つだが、これが各部を貫くモチーフになっている。プロローグにあたる部分で、語り手は石段の下に立っている。石段をのぼった右側には友人の家、左側にドイツ人の屋敷がある。それらの上空に「金色の三日月が懸つて、それに向ひ合つてヴァイナスに相違ありません、きらきらとよく光る大きな星があり、二つの天體は、おあつらひ向きの土耳其の旗になつてゐる」(101頁)。

この絵画的光景によって、語り手は十年以上前の記憶を呼び覚まされる。この回想が中間部

に相当する。その年のクリスマスが近づいたころ、当時語り手が寄寓していたらしい「曲りくねつた小路の奥にある舞踏教習所」を「愛らしい異國の少女」が訪ねて来る(101頁)。クリスマスの余興用に先生から何かを教えてもらうためであった。「男か女か判らぬ様な顔」(102頁)をしている少女の言葉は「日本の子供とちつとも變らない」どころか、本人によると「五ヶ國語を自由に話せる」という(103頁)。

ただし、語り手は直接少女を目にしたわけではない。先生である女性から少女に会うことを禁じられたからである。「あんたなんかにとっても見せられないよ。あんたが一目見ると、本當にどう思ふか判りやしない位よ。十四五歳で顔が眞白なの！」(102頁)と言われるからには、少女(少年)愛を見破られてのことだろうか。しかし、「何よりあんたの気に入らさうなのは、その胸の所にこれつばかりの」「お三日月様がくつゝいてゐるの」(102頁)と続くところを見ると、むしろ足穂自身の「天体嗜好症」(これは彼の別作品の題名でもある)を警戒してのことだったかもしれない。

結局、少女は「三四回」やってきて一通りのことを教わっただけで姿を消す。少女が去った後、語り手が口にせず胸にしまいこんだ言葉——「跡をつけて行くと、青い街燈が射してゐる煉瓦塀のヒビの中へ入つて了ふのぢやないか」(103頁)は、いかにも足穂らしい夢想と言うべ

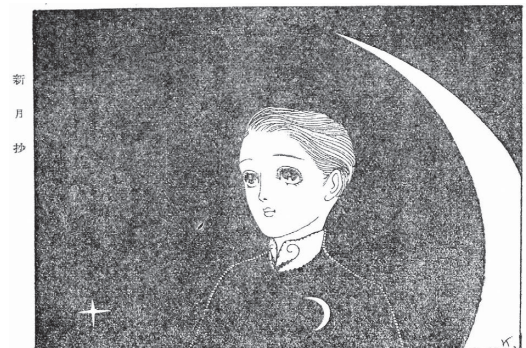


図1 「新月抄」挿絵／『むらさき』4-13(昭和12年12月)、105頁

きだろう。

ところで、女の子の胸に光っていた三日月は単なるアクセサリーではない。

(そのお月様は何のおまじなひなの)と訊ねたらば、(回教協會小學校)だつて云ふのよ。(そんな學校何處にある?)と云つたら、(山本通に)つて云ふの。この家には随分方々の學校の子供が来るけれど、そんなの聞かないわね。(102頁)

少女は神戸のムスリム・コミュニティの一員なのであった。特徴からするとタタール人に相違ない。作品の最後の部分には、神戸モスクを足穂が実際に訪ねていったときのことが書かれているのだが、関連するモチーフを含むものとして、この不思議な「三日月少女」譚がその前に挿入されたのだろう。

そうだとすれば、しかし、いささか解釈に窮する点も出てくる。神戸モスク完成(1935年)後あまり月日を経ない時点で書かれたこの作品で、「三日月少女」譚は「十年以上」前の話として語られている(101頁)。たしかにその頃から神戸にムスリム・コミュニティは存在した。だが、当時の「山本通」に「回教協會小學校」と呼ばれるようなものはなかったはずである。神戸でタタール人ムスリム子弟への初等教育が始まったのは1929(昭和4)年頃になってからで、教場が設けられた場所も山本通ではなく、熊内橋通である⁽¹³⁾。さらに言えば、ムスリマである少女が、なぜクリスマスの余興をやるのか。

実は「新月抄」の中間部には原型となった作品がある。「新月挿話」(1929)がそれで、筋立てはほぼ同じだが、細部がいろいろと異なっている⁽¹⁴⁾。もっとも重要な違いは、そもそも舞台となっている街が神戸ではなく東京であるということだ。「あんたどこの學校?」「東京回教協會の學校」「そんな學校どこにあるの」「神田」という会話が交わされる(26頁)。つまり、も

とは東京のタタール人をモデルにした作品だったのである。東京回教学校(クルバンガリー校長)は、実際には神田ではなく市外柏木(当時)にあったものの、すでに1927(昭和2)年にはできているので、年代的にも矛盾しない。

足穂は東京での見聞をもとに「新月挿話」を書いたのであろう。作品発表当時、彼は東京住まいだった。創作の種をどこから仕入れたかは不明だが、創立後間もない東京回教学校の制服の徽章のことまで知っていたらしい。この作品には「こゝに三日月がついてゐるの、お星さまと一しよに」というふうに、三日月だけでなく星のことまで書かれていて、実際の徽章を正確に表現している(図2参照)。これが新作「新月抄」になると、プロローグと対応させるなら星のあるほうがふさわしいにもかかわらず、星に関する記述が消えている⁽¹⁵⁾。

クリスマスについては、旧作「新月挿話」では、「クリスマスしないの」と訊かれた少女が「しない」と答え、続けて「いつするの」という質問に「お正月の四日に」と答えている(26頁)。後の質問はおそらく「では、ダンスはいつ披露するのか」という意味だろう。つまり、クリスマスの余興の習い事に來たのではないことになっている。少女がムスリマであることを考えると、こちらのほうが設定に無理がない。それがなぜ変更されたかは不明だが、足穂らしいある種の童話的雰囲気を作り出すためだったのか



図2 東京回教学校の徽章／『ホーム・ライフ』昭和13年1月号、65頁(毎日新聞社監修『ホーム・ライフ』復刻版、第9巻、柏書房、2008年)

もしれない。

ただし、原型となった「新月挿話」があらゆる細部において「新月抄」より自然かというところ、そうでもない。少女の出身に関する部分がそうである。旧作では冒頭付近で「十二か三の西洋の子供」と述べられ、のちに語り手は「その子供がドイツ人」(26頁)であると聞くが、これは「東京回教協會の學校」の生徒であることと齟齬をきたすように思える。少なくとも自然ではない。この点、新作では「異國の少女」としか述べられておらず、設定に矛盾がない。「ドイツ人」という要素は(是非とも必要とは思われないものの)プロローグのほうへ移されている。

いずれにせよ、足穂は新たに神戸での体験をもとに「新月抄」を書くにあたって、イスラムや三日月のモチーフが共通する「三日月少女」譚を組み込むことにした。そのとき、一貫性をもたせるために舞台を東京から神戸に変換した。神戸モスク見学のおりには、附属学校も見たであろう。そこで学校がある場所を「山本通」としたのではないと思われる。実際には、モスクや附属学校は山本通ではなく中山手通にあったが、山本通と隣接するため、誤って記憶された可能性がある。

次に最後の部分を見てみよう。この部分は「去年の秋の或日、私は、殆んど忘れてゐた三日月少女を新しく思出したと共に、多分その弟妹と云へる一群の少年少女に逢つた事がありました」(103-104頁)という言葉から始まり、中間部からのスムーズな移行がなされている。ところが、語り手はすぐにその話題には移らず、「これより先に、私はニヤーズと云ふ印度の青年詩人と知合ひになりました」と述べて、このインド人青年との思い出を語り始める。「最近に日本へやつて來た人で、何時もひとりぼつちで、小さい借家の一室でタイプライターを打ち續けてゐる様な人物でした」(104頁)という記述からは、異國の街の片隅に暮らす青年の孤独がしみじみと伝わってくる。しかし、おとなし

いだけの人物ではない。

そして私はうつかりした質問の端を捉へられて、荒い縞の衣を付けて馬上に鐵砲を亂發し乍ら走る人々と、ニヤーズ氏等における回教徒の相違について長々と聽かされました。東洋の將來と云ふ問題になると、愼み深いこの紳士の口吻は激して、濃い髭の上にある眼は輝くのでした。(104頁)

ニヤーズ氏の、いかにもまじめで理想に燃えた姿が目についてくる。そして「私が晴れた午後、山の手の一角に新らしく出來た回教寺院を訪れたのは、以上の様な動機からなのです」と、ニヤーズ氏との邂逅によってイスラムへの関心が芽生えた事情を語り手は明かす。ただその直後には、「然し斷つて置きますが、ニヤーズ氏と教會とは直接の關係はありません。革命家めいた青年紳士は其處に餘り交渉を持つてゐないと私には受取られたのです」と何かしら弁解めいた言葉が添えられている(104頁)。

この部分は一般の読者にはいかにもわかりにくい。結局、ニヤーズ氏は何者なのか、ムスリムかどうかすら判然としないだろう。実のところ、ニヤーズはアフマディーヤの初代駐日代表兼ジャーナリストとして1935(昭和10)年6月から1938(昭和13)年6月まで神戸に滞在した人であった⁽¹⁶⁾。ときに異端視されることもあるアフマディーヤであるから、神戸モスクとの微妙な關係も理解できる⁽¹⁷⁾。足穂の筆致はその微妙なところを表現しているようである。

ニヤーズ氏に関する短いエピソードを語った後、語り手はモスク訪問時の描写を始める。

人形みたいな少年少女が取次ぎをしてくれました。黒い長い衣を付けた老人が現はれました。正式には名稱があるのでせうが、私には露西亞の小説に出て來る人物が聯想されました。この背の高い人に案内されて、私は新らしい伽藍の内部へ入つたのでし

た。(104頁)

書き方はいかにも足穂らしい。当然外国人(タタール人)のはずだが、具体的な属性には触れず、「人形みたいな少年少女」という可愛らしいおとぎ話めいた表現だけが使われている。モスクのイマーム・シャムグニかと思われる人物も「タタール人」や「トルコ人」とは呼ばれない。ロシア文学から得られたロシア的イメージが重ねあわされるのみで、異国の人であることだけが表現されているように見える。

初めて足を踏み入れたモスク内部については、「外部から想像してみた様なものは何一つとして見當りません。鏡の様に磨き出された大理石の聖壇めいた場所がありますが、佛教寺院に見掛けられる様な手の混んだものでなく、椅子一脚もありません。何だか欺された様な呆気なさです」(104頁)という調子で、新鮮な驚きを表現しつつ、細かな描写を続けていく。自らの無知を隠すことはしていない。「英語と云ふものを使用する事は餘り好まれてゐない風」(104頁)だったので、意思疎通がうまくいかない場面もあったらしい。礼拝の方角を尋ねると、案内者が「頭上に開かれてゐる大きな四角い突抜きの窓」を指さして、「メツカは只この上方にある」と言うので、「何處からでも太陽に向つて拜めばよいのだと、私はその動作と表情とに據つて察したのでした」と誤解したままを記している(105頁)。

無論、足穂の頭の中にはすでに『千夜一夜物語』をはじめとする文学作品やアメリカ映画『バグダットの盗賊』(The Thief of Bagdad, 1924)等から形成されたイスラム的建造物のイメージがあった⁽¹⁸⁾。

〔前略〕露臺に出ました。此處にはお馴染のバグダットの都を想わせるラツキヨウ形をした圓屋根があります。私は生れて始めて回教寺院の圓屋根に手を觸れてみました。(105頁)

私は、圓屋根の傍に聳えてゐる尖塔の中へ入りました。これはその頂上からお禱りの時刻を知らす為のものである事は、吾々は今迄にも幾度か映畫の中で知らされてゐます。(105-106頁)

「圓屋根」や「尖塔」は、モスクの外観を形づくる、ある意味、表層的で特徴的な部分である。語り手はこれら既知の部分を実物によって確認しながらも、それだけにとどまらず、実際に手を触れたり、内部を登ったりして、そのときの印象を細かに記録する。

このように、第三部にあたる部分は、足穂にとって未知の世界であったモスク内部を魅力的な筆致で描写していて興味深い。しかしながら、最後の部分にさしかかると、やはり語り手の視線はモスクの外へと向かう。

尖塔の上は何の變哲もない、只、數箇の窓だけがある場所で、戸を開いてみると、眼の下に山と海と街とのパノラマが展開してみます。悲しい程に明るい埠頭のほうに鷗が小さく小さく舞つてゐます。

貴女が神戸をお通りになつたら、高架線の三ノ宮驛あたりから山手の方を御覧になつて下さい。玩具の様な赤や青の家屋がゴチャゴチャと積重つてゐる山裾の右の方に、一きわ高く聳えてゐる白い土筆形の尖塔と、それに挟まれた圓屋根とを見付けるのは造作ない事でせう。夜ならば、或は蛍籠の様な燈火の星空を背景に、美しいネオンの三日月が數箇輝いてゐるかも知れません。これが日本に一つだけある回教のお寺なのです。若しも貴女が其處へ出掛けられたら、東方の同胞は手を差し伸べて貴女を迎へるに吝なものではないと信じます。貴女はこの時、(砂は夜もすがら立上り、立亂れ多くの事を囁いた、やがてその砂は死に風も眠た。かゝる沙漠の幾夜を経て、遂に彼方に見えそめた憧れの白い大理石のバ

ブルクンドの都)を考へられるでせうか? 貴女のお兄様がゐられるKwansei Gakuinの徽章を聯想されるでせうか? それ共又太陽を受けた新月が燦爛と光芒を放つ東洋の將來に想ひを馳せられるでせうか? …… (106頁)

モスクから眺められる神戸のパノラマ風景が描かれた後、今度は構図を鮮やかに反転させて街から見たモスクの外観が描かれる。さらに、ときは昼から夜へ移り、作者の愛好する三日月のモチーフも出てきて、またしても表層的なイメージの輝きにあふれた足穂の童話的世界が現われる。そして最後は、やはり三日月(新月)からさまざまなイメージが展開していく。「バブルクンド」は足穂がロード・ダンセイニ(ダンセイニ卿Lord Dunsany, 1878-1957)から借用して「黄漠奇聞」(1923)に描いた空想都市であるが、この作品では三日月のモチーフが多用されている。また、足穂が通った関西学院の校章は三日月に「K.G.」の文字が入った意匠であり、「新月」と称されることが多い。三つ目のイメージはニヤーズ氏との対話のこだまと言えるのだろうか。「東洋の將來」における日本とイスラム圏の共栄をイメージしたものと解釈できるのかもしれない。いずれにせよ、こうして神戸モスクもまた、足穂的幻想都市のなかに取り入れられていくのである。

3. 島尾敏雄——白系ロシア人に混じって

島尾敏雄(1917-86)の作品には日本に住む外国人や「混血児」がよく出てくる。横浜、神戸、長崎という三つの港町で人生の初めの時期を過ごしたことが、彼をそうした人々に近づけたようである。とくにロシア人は彼の作品のあちこちに登場する。「南山手町」(1939)や「長崎のロシア人」(1959)、「亡命人」(1980)など、在日ロシア人について書いたエッセイも複数ある。「そこばくの気持ちを彼らに寄せるようになった」理由について、島尾は「亡命人」のな

かで次のように述べている。

まず考えられるのは、亡命ロシア人との接触だ。私が幼少年時を過ごした場所は横浜と神戸であったから、日常にヨーロッパ人を目にするなど珍しくはなかった。しかしその頃の彼らは一般の日本人にとってひどく懸け離れた存在であった。住宅にしても明らかにそれとわかる装いの場所と建て物が選ばれていたし、普段は日本語も話さず町の人とつき合うことも殆んどなかった。ただ亡命ロシア人だけが、日本人の、それもどちらかと言えば貧しい住宅街のあいだに伍して住み、彼ら自身貧しさをあらわにして片言の日本語を使い、羅紗や肉パンを売って、はた目には果たしてそれで生活ができるのかと疑いたくなるような生活を送っていたのだった⁽¹⁹⁾。

一言で言えば、一般庶民の手の届くところにいた唯一の「ヨーロッパ人」が彼らであった。当時、日本語で意思疎通できる西洋人は多くなかったから、余計に印象は強かっただろう。

島尾が彼らを「意識するようになったのは、十五、六歳の頃だった」らしい。「その頃私が住んでいた神戸の町のあちこちにも既に彼らの住みついた姿を見かけることができた」という⁽²⁰⁾。ただ、町で出会う白系ロシア人たちに惹きつけられた理由は曖昧にしか述べてられていない。

肉パン売りの初老の男や、母があつかましいと思ったにちがいない子供たちに、なぜ気持ちが強く引かれるのか、私はうまく説明ができるわけではない。しかし彼らの表情の底に沈んでいる灰色の憂愁とでも言える一種のかげりが、私の心をとらえて離さなかったことは確かであった⁽²¹⁾。

もちろん亡国の民、しばしば貧困にあえぎなが

ら日本の庶民にまじって暮らす外国人への同情はあっただろう。しかし、ある程度似たような境遇の人々は、ほかに——たとえば朝鮮人や中国人、台湾人のなかに——いたわけだから、やはり島尾の目がもっぱら西洋人に向けられていた感是否めない。沢田和彦の分類で言えば、白系ロシア人の「哀切で、美しく、はかない」イメージを島尾は憧憬していたように思われる⁽²²⁾。

では、ロシア人と外見上ほとんど見分けのつかないタタール人はどうだったのか。外見だけでなく、居住状況も職業も日本語能力も、島尾が述べている特徴はことごとくタタール人にもあてはまる。だが、島尾の小説作品に「トルコ人」や「タタール人」は出てこないように見える。彼の目に在日タタール人の姿は映っていなかったのか。

実のところ、島尾も彼らを目にしていなかったわけではない。1973（昭和48）年に初めて公表された「昭和十四年日記」に、在神タタール人の姿が断片的に書き留められている。長崎から神戸に帰省中だった8月24日の条の一部を引く。

青木正雄を、野崎通に訪れたが、ゐないので、例の中島通りの異人地帯を歩く、木造青ペンキの窓から、スラヴ風の女の子の顔があつた。僕はじつと見上げてみると顔をそらした。向ひ側の日本建の二階の廊下の手すりから、赤ん坊をあやす声で「お姉ちゃん」と云ふと、そのスラヴ風の女の子は「はい」と答へた。混血児の荻野生代の家にはJ. Anderson（確か）と表札が出てゐる。アミナの姉さんらしい、すき通のような女の子が短いパンツをはいて石段の上に腰を下してゐるので、真白な股の間がのぞける。私は荻野文代に葉書を出さうかと思つた。ふり向くと、スラヴ風のさつきの少女が窓からこつちを見てゐる。私は上衣をぶらりとさげ、股を広げて大地につつ立

ち、この露地をづつと見渡す。眼もとに陽景が出来てスラヴの少女がこつちを見てゐる。アミナが意地悪く口をつき出した。アミナの姓はAltishe ^{アルティシ} こうした外見のわくわくした浪漫的な、気持の裏側とはどんなもの、私は二人のヴーリヤとリユーヴを連れて、海沿ひの丘の中腹の石だゝみの遊歩道を歩いた長崎での事、何でもないことを思ふ。私のこのどう仕様もない、いたづらの血は一体何だらう。中野重治の『空想家とシナリオ』あの意味の、空想家は、わたし。『LUZON紀行』三枚書く。(436頁)⁽²³⁾

「アミナ」というのがタタール人少女で、「ヴーリヤとリユーヴ」は長崎で隣人だった白系ロシア人の娘である。

島尾は8月25日の条にも、「アミナとハリラが日本の中年の女の人に連れられて歩いてゐる」様子を観察している。「その女はこちらを二度も見た。はつきり二度迄 そして、僕が奇妙なる目付をして見据えてゐるのを、意識した。或はあの日本女は僕を知つてゐるかも知れない。(又しても、『空想家とシナリオ』の雰囲気)」(437頁)というように、相手から不審な目を向けられるほど凝視したらしい。また8月28日にも中島通を歩き、「アフヤ」が口にした神戸弁の言葉を記している(440頁)。

島尾によると、この日記は「戦前につけていた日記の中で幸か不幸か全くたまたま残っていたものを、書き直すことなく活字化したもの」で、「若干の箇所では本名を伏せたり、意味の不明な文章を書き換えたりした位で、あとは句読点をはっきりさせただけで、当時書いたものをそのままに発表したもの」だという⁽²⁴⁾。したがって、断片的で文意がわかりにくい部分が多いのは仕方がない。

だが、いくつか指摘できることはある。この日記を書いていた当時、島尾は22歳だった。ずっと年下である少女たちの名前をどのように知ったのか不明だが、ややストーカーじみた雰囲気

はある。少女の一人に性的な視線を向ける場面まで率直に書かれている。そもそも私的な日記だったとはいえ、それを「そのままに発表」したことに戸惑いを覚えないでもない。しかし一方で、このような叙述は島尾文学において珍しいものではないのも事実である。『死の棘』(1960-76) や一連の夢文学を持ち出すまでもなく、島尾の作品にごく私的な体験や想念が包み隠さず暴露されていることは周知のとおりだ。彼の作品にしばしば描かれている白系ロシア人や「混血児」の少女たちに対する執心と同じものがここにも認められるだろう。

興味深いのは、彼女らの民族的出自がまったく書かれていない点である。「スラヴ風」の少女が本当に「スラヴ」(ロシア人)だったかどうかはわからないが、ともかく「スラヴ」と認識されているのに対し、「アミナ」とその姉や、「ハリラ」、「アフヤ」についてはそうした記述が何もない。「タタール人」はもちろん、当時の日本でもっとも一般的だった「トルコ人」という呼称すら見当たらない。ムスリムという宗教的属性も出てこない。少なくともこの日記においては、ロシア人もタタール人もあまり明確に区別されている印象がないのである。結局のところ、タタール人少女らに対する島尾の視線は、白系ロシア人の少女に対するエキゾチシズムに溢れた関心・憧憬と同質のものであったように感じられる。

以上は1939(昭和14)年当時の島尾の日記から得られる印象であるが、戦後にも、彼が在神タタール人に言及した文章がある。鈴木正四の『祖國の解放——トルコの場合』(岩波新書, 1952年)に対する書評(1952)がそれである⁽²⁵⁾。冒頭部分を見てみよう。

トルコに対して恐らくは偏見をしか持ち合わせないだろう。然し偏見から眼をそらしてはいけない。偏見を吟味することからしか、偏見を取除くことは出来ない。私の現実に見たトルコ人は、神戸に住んでいた

時の隣人としての彼等である。太っちょの母親、子供たちの達者な神戸弁、それは第三者の眼には亡命ロシア人と区別が付きかねた。彼等はアラビヤ人風の名前を持っていたが。然し集団としてのトルコ人がもう少し意味あり気に私の眼に写り出したのは、アジアの歴史を頭に入れようと試みた時のことだ。〔中略〕然し尚私の頭の中には突厥風な騎馬民族とタラス・ブリーバのようなタタール人とかが、絵そらごとのようにトルコ人の概念の内容を成して居り、そして眼前には隣りのアミナやアフヤがいたというわけだ。(85-86頁)

『祖國の解放』は、第一次世界大戦で敗戦国となったオスマン帝国(のちトルコ共和国)による主権回復のための闘いを描いた本である。したがって、話の枕とは言え、この部分は本の内容と直接的な関係がない。ただこれによって、島尾にとってもともと「トルコ人」がどのような存在であったかがわかる。

それは一つには、「突厥風な騎馬民族とタラス・ブリーバのようなタタール人」(?)といった「絵そらごと」のようなイメージである。オスマン帝国やトルコ共和国ではなく、中央アジアのトルコ(テュルク)系諸民族が念頭に浮かぶのは、過去における彼の「東洋史」的関心から来ているのだろう。島尾は1941(昭和16)以降、九州帝国大学文学部文科で東洋史を専攻し、二年後の繰り上げ卒業の際には「元代回鶻人の研究一節」と題する卒業論文を提出している⁽²⁶⁾。「アジアの歴史を頭に入れようと試みた時」とは、当時のことを言っているのではないかと思われる。「タラス・ブリーバ」とあるから、ロシア文学を介したイメージも当然あっただろう。

そしてもう一つ、彼にとってのトルコ人とは、かつて神戸で隣人だった「アミナやアフヤ」であった。ここでは、彼女らがはっきり「トルコ人」と意識されている(ただし、タタール人と

いう認識があったかどうかについてははっきりしない。

島尾が彼女らを明確に「トルコ人」と認識したのがいつのことだったかはわからない。「昭和十四年日記」に書かれていないだけで、当時から彼女らの出自を知っていたのかもしれない。だが、「第三者の眼には亡命ロシア人と区別がつかねた」という一文が添えられているところをみると、当時は意識していなかった可能性もないではない。いずれにしても、この書き方からすると、確たるイメージがあったわけではなさそうである。

わずかな言及箇所をもとに断定的に言うことは不可能だが、少なくともここで検討した記述から暫定的に判断すれば、島尾にとって在神タートル人は、自分が関心を寄せていた「亡命ロシア人」の周辺にいた曖昧な存在にとどまったように思われる。戦前も戦後も彼らの宗教的側面に触れていない点からすると、白系ロシア人とは異なり、彼らと深くつき合うことはついになかったのだろう。

4. 西東三鬼

——戦時下の日本に暮らすエジプト人

島尾が九州帝大で学んでいたころ、正確に言えば、アジア太平洋戦争が始まって一年が経過した1942(昭和17)年12月、「新興俳句」運動を代表する俳人の一人、西東三鬼(本名:齋藤敬直, 1900-62)が神戸にやって来た。1940(昭和15)年8月にいわゆる「京大俳句事件」に連座し、治安維持法違反に問われて検挙された彼は、同年11月には起訴猶予となり、留置先の京都から妻子のいる東京へと戻っていた。ところが、二年後に保護観察の期限が切れると、妻子を捨てて東京を出奔、単身神戸に居を移し、戦後の1948(昭和23)年初頭まで同地に暮らした⁽²⁷⁾。

終戦まではほとんど句作できる状況になかったので、俳人としての三鬼にとって、当時は空白期間と言うに等しい。しかし、代わりに彼は

戦後、連作短篇形式による自伝的小説『神戸』(1954-56)および『続神戸』(1959)を書いた⁽²⁸⁾。散文によって当時の自らの奇妙な生活世界を表現したのである。これらの作品は独特の諧謔味をそなえた三鬼ならではのもので、一種の現代的俳文として独自の価値をもっている。俳句に造詣の深い作家、小林恭二(1957-)は「戦後の短編ベスト3」に「躊躇なく三鬼の『神戸』を選」び、それを「色川武大の『怪しい来客簿』や村上春樹の初期作品の魁となるべき小説である」と高く評価している⁽²⁹⁾。

このように、両作品は読み物として抜群の面白さをもっているが、その大枠は三鬼の実体験に基づいており、事実関係において虚構的要素は多くないと思われる。たしかに作品全体を覆っているユーモラスな調子は内容の信憑性に疑義を抱かせるかもしれない。実際、新興俳句の先駆者、山口誓子(1901-94)は『神戸』をフィクションだと疑っていたらしい。しかしこれに対して、三鬼は次のように反論している。

私は「神戸」を書き出した時、事実以外は書かない事を自ら期した。フィクションを入れると小説になつて際限がないからである。ところが、あまり奇妙な人物が続出するものだから、先生 [= 誓子] は時々私の顔をみながら、太い指に唾をつけて眉毛を濡らす仕草をされた。先生は戦前の私の俳句に、人を楽しませるフィクションが多い事を知つてゐられ、嘘俳句の作者が、嘘文章を書き出したと思はれたのであらう。私は文章ばかりでなく、戦後の俳句は、事物と対決して作る。人様のためでなく、私のために作りたくなつたからである⁽³⁰⁾。

『神戸』や『続神戸』の内容が「事実」であり、「全く虚構を避けた」ことは、作品の中でも繰り返し説かれている⁽³¹⁾。もちろん、小林恭二が言うように私小説といっても所詮は虚構を免れない⁽³²⁾。実際、三鬼は一部の登場人物の実

名を（プライバシーの問題からだろうが）変えている⁽³³⁾。作中に出てくるホテルの老支配人の子息によれば、作品から安宿イメージを抱かれがちなこのホテルは、当時の神戸で最高級のオリエンタル・ホテルやトア・ホテルの「次くらいにランクされる、やはり高級ホテル」だったという⁽³⁴⁾。また『神戸』第三話に登場する俳人の三谷昭（1911-78）も、自分がホテルに三鬼を訪れたときの服装描写に間違いがあることを指摘している⁽³⁵⁾。このように、いくら三鬼が「全く虚構を避けた」と言っても、作品内容すべてを「事実」と受け取るのはナイーブにすぎるだろう。

しかし、作中の出来事はほぼ実際に三鬼が体験したことであり、虚構的要素はおおむね叙述の仕方に関係する、とは言っているだろう。文学的な誇張や粉飾は当然なされているであろうし、それこそ三鬼の文体と不可分のものかもしれない。だが、作品全体を見渡しても、たとえば登場人物自身がまったく虚構の存在という例はなさそうである。同時代の記録とは無論言えないが、個人の記憶・回想としての性格を強くもったテキストとは言える。

ここで我々にとって興味深いのは、戦中および終戦直後の神戸に暮らしていたさまざまなアウトサイダーや外国人がこれらの作品に活写されており、そのなかにムスリムが含まれていることである。とりわけ『神戸』の劈頭を飾る「第一話 奇妙なエジプト人の話」は、題名どおり同宿のエジプト人男性に焦点を当てた話で、戦中期の在日エジプト人が描かれた作品としておそらく唯一無二の例と思われる。書き出し部分を見てみよう。

昭和十七年の冬、私は单身、東京の何も彼もから脱走した。そして或る日の夕方、神戸の坂道を下りてゐた。

〔中略〕

神戸の中央、山から海へ一直線に下りるトアロード（その頃の外国語排斥から東

亜道路と呼ばれてゐた）の中途に、芝居の建物のやうに朱色に塗られたそのホテルがあつた。

私はその後、空襲が始まるまで、そのホテルの長期滞在客であつたが、同宿の人々も、根が生へたやうにそのホテルに居据わつてゐた。彼、或ひは彼女等の国籍は、日本が十二人、白系ロシア女一人、トルコタール夫婦一組、エジプト男一人、台湾男一人、朝鮮女一人であつた。（268頁）⁽³⁶⁾

ここに登場する同宿者のリストは、三鬼が身を置いた社会の周縁性を見事に表現している。日本人12人のうち男性は三鬼と中年の病院長のみである。残りはみなバーで働く女性で、なかには娼婦をしている者もある。白系ロシア人やタール人は「無国籍」、台湾人や朝鮮人は日本国籍であるが植民地出身者、そしてエジプト人は「いはゆる敵性国人」（270頁）であつた。

『神戸』や『続神戸』に登場する外国人はこれだけではない。ほかにもドイツ人（兵士およびユダヤ系を含む）、フランス人、イタリア人、中国人、デンマーク人、アメリカ人などバラエティに富む。三鬼は彼らや他の日本人と言わば全方位外交を繰り広げており、好悪はともかく、それぞれと人間的な交際をしている。なかでも「私の親友」（270頁）と彼が呼ぶ「エジプト人マジット・エルバ氏」には特別の地位が与えられている。第一話が彼のエピソードにあてられると同時に、ほかの話にもしばしば彼が登場するのである。

どこの国の人間であっても開放的につき合う三鬼の態度の背景には複数の要因が考えられる。一つにはもちろん、彼が当初「トア・アパートメント・ホテル」に長期滞在していたことがある。常住が可能なホテルで、いろいろな国から来た外国人客が多かったという⁽³⁷⁾。同じホテルの止宿人同士で、ある程度のつき合いが生じるのは自然だろう。

また三鬼自身、国家によって活動を否定され

た挙げ句、よそ者として単身神戸でホテル住まいをしていたわけであるから、日本人・外国人を問わず、戦時下の日本社会の周縁で孤軍奮闘して生きる人々と共鳴するところがあっても何ら不思議はない。

私が三谷昭と暗闇の中で別れた頃から、私のホテルも「戦時色」が次第に濃くなつて来た。県庁の外事課や私服の憲兵がのべつ出入りした。

事実、ホテルには、何を仕事にしてゐるのか判らない白系ロシアやトルコタールやエジプト人などが居たし、大部分の客といへば、下宿してゐるバーのマダム達であつたから、ホテルは「非国民」の掃き溜のやうに見られてゐたのである。(282頁)

「『非国民』の掃き溜のやう」なこのホテルは作中、「難破船のやうなホテル」(273頁)、「コスモポリタンが沈殿してゐるホテル」(274頁)、「コスモポリタンのハキダメの、国際ホテル」(297頁)、「奇体なハキダメホテル」(305頁)、「やくざホテル」(321頁、以上『神戸』)、「やくざな国際ホテル」(328頁)、「奇怪なホテル兼アパート」(同頁、以上『続神戸』)などいろいろな呼び方をされている。いずれも悪口めいた呼び名には違いないが、けなしているようでいて、むしろ内に秘めた三鬼の愛着と矜持を示しているように思われる。

〔前略〕私は若い頃、英国領の植民地に出稼ぎに行つてゐたので、そのホテルの、国籍のはつきりしないやうな外国人や、いづれも一騎当千の酒場の姐御達の中にゐても、アツトホームでありこそすれ、とまどふやうな事はなかつた。

〔中略〕

彼等や彼女等は、戦時色といふエタイの知れない暴力に最後まで抵抗した。エジプト人、トルコタール人、白系ロシア人、

朝鮮人、台湾人そして日本娘達の共通の信仰は「自由を我等に」であつた。だから彼等はそのハキダメホテルで極めて行儀が悪かつた。そして奇妙な事には、一様にプライドが高かつた。(321頁)

もちろん、戦中期の体験を回顧的に綴った文章であるから、美化や理想化はあると考えたほうがよい。しかし、少なくともこうした文章からは、これら「非国民」の共同体への三鬼の共感、連帯意識のようなものが感じられる。

もう一つ、三鬼が彼らに親しみを感じていた背景には、上の引用にあるように、若いころの外国体験があつた。彼は1925(大正14)年末から数年間、歯科医をしながらシンガポールに暮らした。「豆自叙伝」(1950)によると「熱帯の夜々、腋下に翼を生じて、乳香と没薬の国を遊行した。〔中略〕在留のバグダッドやアレキサンドリアの市民を友とし、彼等の国へ永住しやうと計画した。偶々、猛烈な排日運動と激烈なチフスに遭ひ、哀れなるかなイカルスは、翼焼かれて地に堕ちた。失意悶々、故国へ帰」つたという⁽³⁸⁾。1948(昭和23)年9月の神田秀夫宛書簡には「アラビア人、印度人、中国人、混血児等の友人あり。彼等とそれぞれの街区の夜を彷徨す。アレキサンドリア、コンスタンチノープル等に赴き単身その地に暮さんと念願すれど、勇なくして果さず」とある⁽³⁹⁾。詳述はされていないものの、東南アジアの植民地都市で彼はアジアや北アフリカの人々と広い交友関係を築いていたらしい。とくに中東系の人々と親しみ、彼らの国々に憧れをもっていた様子がうかがえる。そうであれば、エジプト人「マジット・エルバ氏」に三鬼がとくに好意を寄せたのも故なきことではなかったと言えるであろう。

では、そのエルバ氏を三鬼はどのように描いたのか。エルバ氏の名前がはじめて登場する箇所を引く。

下宿人のエジプト人マジット・エルバ氏

は私の親友となつた。彼は当時日本に在留する唯二人のエジプト人の一人であつた。いはゆる敵性国人であつたが、引き揚げなかつた他の英米仏人達と同様に、旅行は許されなかつたが、神戸市内では一応自由であつた。彼はこの奇妙なホテルでの、最も奇妙な人物であつた。商売は肉屋で、山の手の通りに清潔な店を持つてゐたが、もう商品はカラツポであつた。彼はその店に独り住む事を好まず、わざわざホテルに滞在してゐた。年は幾つかなのか、さつぱり見当がつかないが、多分四十歳そこそこであつたらう。小麦色の彫りの深い顔には、いつも鬚の剃り跡が青々としてゐた。恐ろしく胸の厚い男で、まるで桶の胴のやうであつた。かういふ放浪者に似ず、英語も日本語も下手糞であつた。日本滞留十年で、ヨーロッパ、アメリカ、南米と流浪の末、日本神戸に根の生へたエジプト種の強い蘆である。私は青春時代を、赤道直下の英領植民地で暮したので、彼のコスモポリタン気質はよく判つた。彼のお国自慢は、名前のエルバに由来し、彼の説に従へば、彼は正しくナポレオンの追放された島の出生だといふのである。彼は何度もこの話をしたが、その時の彼はナポレオンの落胤のやうな顔をした。(270頁)

まさしく「小説」の登場人物のやうで、このような男が本当にいたのかと疑念が湧くかもしれない。とくにナポレオン云々の話はにわかには信じがたい。ただ、「マジツトはのべつ嘘をついた」といい、彼のことを愛情をもって「エジプトのホラ男爵」(272頁)と呼んでいるところを見ると、あくまで冗談として受け取るべき箇所なのであろう。

その一方で、一俳人が描くエジプト人の生活状況や身体的特徴としては記述が具体的で、モデルなしにこうした人物を創造できるとは思われないだろう。事実、エルバ氏は実在の人物で

あり、いくつかの史料に彼の痕跡を見ることができる。

その一つは内務省警保局が1935(昭和10)年から1942(昭和17)年まで毎年刊行していた『外事警察概況』である。附表に毎年末時点での「内地居住外国人職業別人員表」があり、1936年から1938年まで「肉類商」、1939年は「獣肉鮮魚商」、1942年は「肉販賣業」として各1名のエジプト人が数えられている。1935年には「茶商」のエジプト人がやはり1名いるが、「肉類商」欄のすぐ下なので、誤記の可能性もある(この表にはときおり誤記がある)。1940年と1941年には該当する者が見あたらないが、その他の欄や無職者に入れられた可能性もある。いずれにせよ、当時の在日エジプト人のほとんどが兵庫県(神戸市)に住んでいたこと(表1参照)を考えれば、上の肉屋の類がすべてエルバ氏を指していることはまず間違いない⁽⁴⁰⁾。そもそも、当時

表1 在日エジプト人居住県(1935—42年)

1935 年	静岡	1
	兵庫	21
	計	22
1936 年	静岡	1
	兵庫	27
	計	28
1937 年	静岡	1
	兵庫	25
	計	26
1938 年	東京	4
	静岡	1
	兵庫	21
	計	26
1939 年	東京	4
	静岡	1
	兵庫	25
	計	30
1940 年	東京	1
	兵庫	23
	計	24
1941 年	兵庫	11
	計	11
1942 年	兵庫	5
	計	5

(出所:『外事警察概況』『内地居住外国人国籍別人員表』各年版)

の在日外国人の「肉類商」等は中国人を除けば極めて少数で、非常に珍しいのである。

また、外務省記録(外務省外交史料館所蔵)にも情報が見つかる。「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第四巻に収録された「在留外国人名簿」中に彼の名前が見える⁽⁴¹⁾。1943(昭和18)年前後に作成されたと思われるこの名簿には二世帯五名のエジプト人が掲載されているが、そのうち「A・M・イルバー」が「マジット・エルバ」を指していると思われる。男性で、家族はおらず、年齢は52歳、住所は神戸市の北野町になっているが、職業欄は空白になっている。三鬼の言うとおり、すでに商売は成り立たなかったのだろう。

こうした公文書に加えて、当時のことを知る人の証言がある。戦前から神戸に住んでいたタタール人(トルコ国籍)の故キルキー氏(Ferid Kilki, 1927-2013)は少年のころ、エルバの店によく遊びに行ったという⁽⁴²⁾。彼にとっては「マジドおじさん」であり、ほかの名前は知らなかったそうである。「マジドおじさん」は神戸モスクの筋向い、二三軒東よりに店をもっていて、そこで肉を売っていたらしい。要するに、ハラール肉をムスリムに提供していたわけである(「インド人のなかには〔イスラムの食肉規定に〕厳しい人たちもいた」由)。おそらく当時の日本で唯一のハラール肉店だっただろう。主に羊、ヤギ、それから牛肉も扱っていたとキルキー氏は言う。「マジドおじさん」は鬚をはやし、いつも赤いトルコ帽をかぶっていて、「なかなか男前だった」。独り者であったという証言も、他の資料と一致する。キルキー氏の記憶では、彼は店の二階に住んでいたという。ホテル住まいはその後の話であろう。

『神戸』を読むかぎり、三鬼は戦時下の日本でエルバ氏が置かれた状況をよく理解していた。「当時日本に在留する唯二人のエジプト人の一人」ではなかったかもしれないが、二世帯のうちの一世帯ではあった。エジプトは1941年12月12日に日本と断交していた(対日宣戦布告

は1945年2月)から、「敵性国人」であったのもそのとおりだった。また、エルバ氏はカイロにいる富商の伯父が自分に送金してくれる「白昼夢」を見ており、その送金ルートの一つとしてスイス公使館の名が挙げられている(271頁)が、当時の日本におけるエジプトの利益代表国はスイスであったから、根拠はあるわけである。ときどき登場するタタール人(名前は書かれていない)に対して「トルコ人」ではなく「トルコタタール人」という呼称を使っていることからしても、三鬼はかなり事情に通じていたように思われる。

三鬼が描くエルバ氏は貧乏である。「彼は一着だけのフラノのズボンの膝に穴が開いてきたので、膝のあたりでチョン切つてショートパンツに改造し、厳寒の候、広間のストーブに当る」ような調子だった(271頁)。

このエジプト人が、どこから生活費を得て来るのか、誰にも判らなかつた。彼が時たま、牛肉の大塊をホテルの厨房に売りつけると、翌日の新聞に、姫路郊外で耕牛が一頭盗まれ、加古川の河原で密殺された記事が出るのであつた。哀しきエジプト人は、独特のルートから、さういふものを仲買してゐたのであらう。(271頁)

こうした話がどこまで本当かは不明だが、窮乏生活を送る「哀しきエジプト人」に三鬼は優しい。エルバ氏が入院したときも食事の世話をしている。だがエルバ氏もプライドをもって生きているので「一度も私に金を貸せと云わ」ず、入院見舞いに三鬼が与えた五十円も「ワタシビンボウ、センセイビンボウ」といって返すのである(271頁)。

エルバ氏は「回教徒で、宗門の戒律は厳重に守つてゐた」から、ベーコンは口にしない。しかし、ビールは飲み、ときにレコードを聞きながら「感極まつてでたらめ踊りを踊」るような茶目っ気がある(270頁)。「のべつ嘘をついた」

が、「彼の各国漫遊談は、その嘘が混じるために、実に独創的で、新鮮で、いつまで聞いてても飽きなかつた」ような魅力的な嘘だった(272頁)。「第一次世界大戦の時、エジプト軍の軍曹」で、「英国風の、エジプト軍の軍服姿の写真」をもっていた。「砂漠の一戦以来「ドイツハテキ」と肝に銘じたらしく」、当時神戸にいたドイツ水兵の「途方もないラツパズボンを批評して「オペラヘイタイ」と称して軽蔑してゐた」(272頁)。とはいえ、戦時中であるから迂闊なことは言えない。

彼は日本の戦争については、固く沈黙を守つてゐたが、私にだけは時々低い声で「ニホンカワイソウ」とささやいた。それは、大戦果々々々で日本中が有頂天のときであつた。(272頁)

ホテルでは三鬼以外にも「パパさん」と呼ばれる老支配人がエルバ氏を気にかけており、金のない彼の「勘定を少なくするために心肝をくだ」いていた(273頁)。三鬼とエルバ氏と老支配人の「三人は話が合つた」(273頁)。エルバ氏にも人情に篤いところがあったのだろう、ホテルに流れ着いた「葉子」という薄倖の女性が亡くなった際、縁者のない彼女を火葬場へと運んだのは彼と三鬼と老支配人だった(291頁)。しかし、さらに胸を打つのは、老支配人が心臓麻痺で死んだときの通夜の場面である。彼に恩を受けた「世界無宿のエジプト人」(287頁)である「この異邦人は、死者の足の裏を自分の黒い額に押し当て、慟哭した」という(273頁)。その後、ホテルは1945(昭和20)年6月の神戸空襲で焼失、その前に三鬼は山手の洋館に移っていたのだが、「戦後九年、エジプト人、マジット・エルバ氏の話は全く絶えてしまつた」(273頁)。

『神戸』を読むと、総じて三鬼はエルバ氏にかぎりない好意を寄せいていたことがわかる。外国でのコスモポリタンな生活に未練があつた

三鬼にとって、神戸の「ハキダメホテル」周辺は、戦時下の日本でそうした雰囲気や多少なりとも感じさせてくれる場所であつただろう。なかでもエルバ氏こそ、そうした「コスモポリタン」を体現する人物だった。三鬼は「葉山雑記」(1960)にも、

真のコスモポリタンといふのは、かつて「神戸」の中に登場して貰つた、エジプト人マジット・エルバ氏の如きをいふのである。彼はコルシカ島で産れ、エジプトの兵隊になり、ブラジルで賭博者になり、メキシコで男妾になり、神戸で肉屋になつた。その流転の間、とにかく食つて来たのである。現在、いづこの空の下に薄黒い肌を光らせてゐるか知らないが、私の再会したい男の一人である⁽⁴³⁾。

と書いている。このあと「その一所不在のマジット氏にしても、談たまたま祖国に及ぶと、大変な民族主義者であつた。してみると、コスモポリタンと民族意識とは矛盾しないらしい」(583頁)と続き、いかにもエジプト人らしい愛国心をエルバ氏もまたもっていたことがわかるのだが、単なるエキゾチックなイメージに終始せず、人間としての多様な側面に注意を払っているのは三鬼ならではのかもしれない。たとえば稲垣足穂風のファンタジックなエジプト人や「アラビア人」イメージとはまったく異なる、生きた人間としてのエジプト人が描かれているという意味で、当時の日本文学では稀有な例と言えるだろう⁽⁴⁴⁾。

5. 谷崎潤一郎・遠藤周作・久坂葉子と周囲の人々——脇役としての「トルコ人」

三鬼がいたホテルにはエルバ氏のほかに「トルコタール夫婦一組」が止宿していた。しかし残念ながら、三鬼は彼らの名前すら出していない。これと同じように、作中に脇役として神戸の「トルコ人」を登場させた作家はほかにも

いる。前稿で言及した林美美子(1903-51)もその一人であるが⁽⁴⁵⁾、最後に、それ以外の作家による作品をいくつか簡単に紹介しておきたい。

谷崎潤一郎(1886-1965)が晩年に発表した「三つの場合」(1960-61)の「三 明さんの場合(細雪後日譚)」には次のような箇所がある。

十一月廿四日、私たちは漸く南禪寺下河原町の元陸軍中將吉田周藏氏の家屋を十萬圓で譲り受けて、正式に一軒の家を持つことが出来た。この十萬圓は、戦争前神戸の青谷に外人向きの家作を二三軒持つてゐたのが、幸ひ戦災を免れたので、それを或るトルコ人を買つて貰つた金である⁽⁴⁶⁾。

1946(昭和21)年に谷崎が京都の南禪寺に家を購入するにあたって、その資金をどう調達したかを書いている。青谷は『細雪』にも登場する地名だが、付近はもともと外国人の多い場所で、稻垣足穂が消息を記したアフマディーヤのニヤーズ氏も同地に住んでいた⁽⁴⁷⁾。隣接する中島通や竈池通には島尾敏雄が会った「アミナ」や「アフヤ」らタタール人が住んでいた。谷崎の近くにもムスリムはいたわけである。時期を考えても、この「トルコ人」はほぼ確実にタタール人だと思われる。しかし、白系ロシア人が『細雪』などに登場するのに対して、タタール人などムスリムは、彼の小説には出てこないように見える⁽⁴⁸⁾。

若い時分に六甲や西宮の夙川や仁川など阪神間に住んだ遠藤周作(1923-96)は中篇『黄色い人』(1955)にトルコ人を登場させた。仁川に伝道にやってきたフランス人デュランは、昭和12年、大水害で家族を亡くし困窮したキミコという日本人女性と神父の身でありながら姦淫の罪を犯し、道をあやまってしまう。妊娠していたキミコは、噂によれば、「神戸にいたトルコ貿易商のメイドであり、彼女をはらませたのもそのトルコ人」だった⁽⁴⁹⁾。『黄色い人』は、

カトリック作家である遠藤周作のテーマ、キリスト教と日本的風土のあいだにある齟齬のようなものを扱った作品の一つである。そうした作品に登場する「トルコ人」は、あくまで脇役で、しかもあまりよい役は与えられなかった。

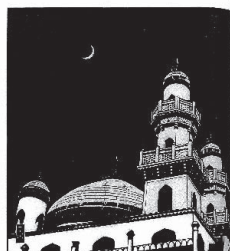
神戸ゆかりの作家のなかでも、島尾敏雄の紹介で世に出た久坂葉子(本名:川崎澄子, 1931-52)は戦後、タタール人女性とつき合いがあった珍しい例である。久坂は1949(昭和24)年に島尾や富士正晴らの同人誌『VIKING』に参加、「ドミノのお告げ」(1950)で芥川賞候補になり将来を期待されたが、その二年後に『幾度目の最期』を書き上げた直後、21歳で自ら命を絶った。かぎられた作品のなかにタタール人を登場させることはなかったように見えるが、亡くなった1952(昭和27)年ごろには「トルコ人音楽家ザイトナ・ジャバールに音楽理論や作曲を学ぶ為」神戸モスクをしばしば訪れていたという⁽⁵⁰⁾。また「ザイトナ」もモスク近くにあって久坂の家に来ていた。音楽評論家の小石忠男によると、久坂の自宅に「音楽関係では、作曲家の徳永秀則さん、タタール系トルコ人ヴァイオリニストで、タタール民謡を材料にしたいくつものヴァイオリン曲を作曲したザイトナ・ジャバールさんらも遊びにきていた」という⁽⁵¹⁾。「タタール系」「タタール民謡」と書かれているので、小石氏は彼女のことをよく知っていたのであろう。一般に、白系ロシア人には音楽家をはじめとして芸術家が多く、それが彼らの日本社会における認知度を高めた理由の一つになっていると考えられる⁽⁵²⁾。他方、在日タタール人からはほとんどそうした人物が輩出していない(映画やスポーツ分野には少し人材を提供した)。同じ旧ロシアからの亡命者でありながら日本における両者の認知度の実数以上の差があるのはこのあたりも無関係ではないだろう。久坂葉子に音楽を教えた「ザイトナ・ジャバール」はタタール人のなかにも音楽家がいたことを教えてくれる貴重な例と言える。

このタタール人女性音楽家を、作家の富士正

晴(1913-87)は、久坂の死後に発表した『贗・久坂葉子伝』(1956)に登場させている。久坂葉子が自殺したのは1952年の大晦日であったが、「木ノ花咲哉」(=富士正晴)は翌日の元旦に「トーア・ロード」を上がったところ、山手にある久坂の家を訪れ、家人が出てくるまで玄関に背を向けて神戸港のほうを眺める。

〔前略〕空には星のキラキラと刺すような光が輝き、目の下には黒い闇にちりばめられたような民家や商店街、ビルディングの燈が風にゆれるようにひろがつていた。ポンポン蒸気の寂しい音、喉太い汽船の笛の音、自動車のクラクション、市電のころがって行く音、そして高架の上を黒々と省線電車の疾走する尻上りの響、そしてすぐ左に回教寺院の三日月の黄色いイルミネーションが小さく眺められる。あそこで彼女はピアノを弾いたことがあると言っていた。トルコの祝祭日、それはトルコの詩人を記念する日なのだと彼女はその国柄をいくらか羨まし気だった。トルコ娘の歌の伴奏を彼女はしたのだ。いくらか中東風に見える容貌を持っていた彼女だったが、そのお祝いの会場で、トルコ人の刺すような敵意をひしひしと感じたと言った。たつた一人の日本人、どういうわけでトルコ人たちは国のお祭りに、彼女にピアノ伴奏させなければならなかったのだろう。そして敵意ある視線を投げたのだろう。彼女はトルコ人たちにとけこめるつもりでいて、はじきかえされたのだ。彼女の親友だという歌をうたつたトルコ娘の名前も聞いたが忘れてしまっている。久坂葉子は実に神戸の女だったなあ、しかも山手の女の子だ。〔後略、傍点原文〕⁽⁵³⁾

山手から海側を見おろす風景のなかにランドマークとしてのモスクを認め、そこから、まだ生々しかったであろう久坂の思い出が語られて



三日月とエトランゼ
神戸新聞
昭和二十二年十二月二十二日

図3 成田一徹(1949-2012)による切り絵作品「神戸回教寺院」／成田一徹『神戸の残り香』神戸新聞総合出版センター、2006年、122-123頁

いる。いかにも神戸らしい風景を眺めながら毎日を暮らしていた、いかにも神戸らしい「山手の女の子」久坂葉子——作者にとって思い入れの深い彼女とその生活世界を描くための背景として、「回教寺院」や「トルコ娘」が登場している。ここには、「ザイトナ」の名前も出てこない。モスクで久坂が「トルコ人たち」から「敵意」を感じるようなことが本当にあったかどうかは不明である。作者としては、何かしら久坂の孤独や被拒絶感を表現したかっただけなのかもしれない。

一方、柏木薫は「その日の久坂葉子」(2006)で、久坂の自殺当日の行動を想像／創造的に再現しているが、そのなかにもタタール人音楽家は出てくる。久坂が三宮のピア・ホールを訪れる場面である。

席に着いた久坂は、ゴールデンバットをふかしながらあたりを見廻した。大晦日のせいか、ほぼ満席である。斜め向こうに外国人のグループがジョッキを傾けていた。中にトルコ人のゼイトナ・ジャバールに似た人が混じっている。ああ、ジャバさんは回教徒だからアルコールはご法度、ここにいる筈はない、と久坂は思った。私はヴァイオリンを弾くあの人に作曲を学び、今年

はV誌に発表した詩「古蘭よ」に曲をつけた。彼女と一緒によく中山手のモスクに行っただけだ。神戸の人はファイファイ教のお寺(現存・神戸ムスリムモスク)と呼んでいるが、あの三日月型装飾の尖塔は今夜も美しく輝いているだろうか⁽⁵⁴⁾。

こちらには「トルコ人のゼイトナ・ジャバール」という名が見える。「回教徒だからアルコールはご法度」というふうに、やや強引で紋切型ではあるが、宗教的属性も示される。また、ここには「古蘭よ」という詩に言及がある。久坂が人生最後の年に作った詩であり、その題名とここでの文脈からイスラムに関係があるようにも見える。しかし、その名前がイスラムの聖典にインスピレーションを受けている可能性はあるものの、詩の内容自体はイスラムとは関係がない⁽⁵⁵⁾。

なお、神戸モスクは、久坂の詩や日記に書かれた短歌類にも登場する。「題未定」の詩(1949年7月9日)として、

ゆふぐれ、／むらさきのそらのなかに、／
三日月は三つ高く、／祈りの声は、低くきこえる。／港街、異人のすむ山の手、／
ファイファイ教の寺院はこゝに、／夏のゆふぐれのなかに、／天をあほぎて／人々は祈る／
ひるまは——／かみもしろく、ひげもしろい／をじいさん。／赤いベレーを年中かむって、／
教主か、伝道師か、／鉄の門に倚り／石の玄関にすわり、／ごく平凡にいつも笑ってゐる／
何処の国からやって来た人か、／この人には、アラーの神の他はなし。／
ゆふぐれ 祈りの声はつゞく、〔斜線は原文の改行を表す〕⁽⁵⁶⁾

という作品が残されている。日記の昭和24(1949)年2月10日の条には、

回教の寺院の塔はおごそかに

おもむろに消ゆ ふゆのひぐれどき⁽⁵⁷⁾

とあり、また同年3月17日の条に書かれた詩のなかには、

回教の寺院の鐘の

いとおごそかに朝は来にけり。⁽⁵⁸⁾

という一節も見つかる。いずれも、とりたてて注目すべきほどのものでもないが、近所に住む久坂葉子にとって、モスクは親しみのある日常風景の構成要素となっていたらしいことがわかる。ただし、「何処の国からやって来た人か」や(モスクに鐘はないにもかかわらず)「回教の寺院の鐘」というような表現を用いているところからすると、当時、実際にはまだ縁のない異世界だったに違いない。「ゼイトナ・ジャバール」とのつき合いはまだなく、事情に疎かったのかもしれない。

6. むすびにかえて

本稿では、昭和戦前・戦中期から終戦直後の神戸を舞台とする文学作品をいくつか取り上げ、そこに登場するムスリムの描かれ方を考察してきた。同時に、簡単にではあるが、それぞれの作家がどういう経緯・文脈でムスリムと遭遇することになったのかについても、注意を払うようにつとめた。とはいっても、管見の及ばなかった作品も、当然、いろいろあるに違いない。また、もっとも意識的に在神ムスリムを描いた陳舜臣の作品を、紙幅の関係で、今回は扱うことができなかった。したがって、「神戸篇」の枠内でさえ暫定的となる所見を述べることができるにすぎないが、それを以下に掲げ、今後のより大きな文脈における考察のための土台の一つとしたい。

まず前稿との比較から始めよう。前稿(東京・朝鮮篇)でとりあげた作品に登場するムスリムはすべてタタール人だった。それに対して神戸を舞台とした作品には、タタール人がもっとも

多く出てくるとはいえ、エジプトやインド出身のムスリムも印象的な形で登場している。旧稿でも述べてきたように、当時の在神ムスリム・コミュニティは在京ムスリム・コミュニティといろいろな点で性格を異にしていた⁽⁵⁹⁾。その一つは、民族的な多様性である。東京では割合としてタタール人（やバシキール人など旧ロシア出身のムスリム）が圧倒的に多かったが、神戸ではインド系や中東系（多くはアラブ）が相当数おり、協力してモスクを作った。そうした違いが文学作品にも反映していることが見て取れる。

タタール人の呼称に関しては、東京と同じように、一般には「トルコ人」が広まっていたようだ。「タタール」という民族名を使っているのは三鬼や音楽評論家の小石だけである。前者に関しては、ホテルの同宿人としておそらくかなり詳しいことを知っていたのだろう。いつもやってくる外事課の人間との会話から自然とそうした呼び名が頭に入ってきた可能性もある。小石は民謡音楽という入り口をとおして「タタール」という属性を印象づけられたのだと推測される。

東京との比較に戻れば、東京の中心性と神戸の周縁性の対照も作品をとおして感じられる。前稿で見たように、東京を舞台とする作品には国策（回教政策）がらみのものが含まれるが、神戸にそうしたものはない。宮内寒彌の「贋回教徒」に登場する若いタタール人女性ハルナは個人的な理由から東京での生活を捨てて神戸に向かったが、西東三鬼もまた国家の抑圧から逃れるようにして東京を去り、神戸に居ついた。そして、戦時下の日本に暮らす「敵性国人」の「マジット・エルバ」氏と出会い、親交を結ぶのである。

モスクのランドマーク性の高さも神戸の特徴と言えるかもしれない。街の規模が東京に比べて小さいからか、山手から浜へとなだらかに傾斜する地形ゆえか、（かつては）モスクが街の中に埋没せず目立っていた。稲垣足穂にせよ久

坂葉子周辺の人々にせよ、そうしたモスクを都市的風景の中に入れて楽しんでいるようなところがある。足穂の場合は、さらにそれを独自の幻想的イメージ空間のなかに取り込んだと言えるだろう。

他方、モスクの内部は神や他のムスリムとの出会いの場ということにもなるが、足穂の例を見ても、モスクでタタール人女性から音楽を習ったという久坂葉子を見ても、宗教としてのイスラムを深く考えた痕跡はあまり見られない。総じて言えることだが、ムスリムが作中に登場するときでも、宗教そのものへの関心は高くなかったようである。飲食に関する禁忌など表面的な部分はあるものの、イスラムという宗教の本質に関わる事柄にまではほとんど言及されていない。それこそ遠藤周作が日本におけるキリスト教受容に関して悩んだ点とも言えるが、彼の『黄色い人』に出てくる「トルコ人」はその信仰など問題にもされない脇役だった。

本稿でそれなりの紙幅を割いて検討することができたのは稲垣足穂、島尾敏雄、西東三鬼の三人である。神戸にいたムスリム住民に対するそれぞれの眼差しは、それぞれの経歴や関心に応じて異なっているが、いずれもイスラムそのものに強い関心をいだいていたわけではない。それに対して、イスラム史にも造詣の深かった神戸の作家、陳舜臣は同じ街に暮らすムスリムをどう描いたのか。続稿ではこれを中心に論じるとともに、戦中期に外国人の強制疎開先となった軽井沢を舞台とする作品などを取り上げることしたい。

<注>

- (1) 本稿は日本中東学会第31回年次大会（同志社大学、2015年5月17日）における発表「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象」および第35回関西アラブ研究会（大阪大学箕面キャンパス、2016年9月24日）における発表「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象——神戸を中心に」の一部を拡充したものである。

- 発表時に質問やコメントを下された方々に感謝する。
- (2) 拙稿「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(1)——東京・朝鮮篇」『アジア文化研究所研究年報』(東洋大学アジア文化研究所)第50号(2015), 2016年, 91(256)–69(278)頁。
 - (3) 拙稿「神戸モスク建立——昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」『アジア文化研究所研究年報』(東洋大学アジア文化研究所)第45号(2010年), 32(113)–51(94)頁。
 - (4) 橋外男『コンスタンチノーブル(君府)』東和社, 1949年, 2頁。以下, 引用にあたっては, できるだけ引用元の表記を再現(ただしルビは適宜省略)するが, 技術的理由により不可能な場合はそのかぎりではなく, 不自然な部分も出てくることをあらかじめ断っておく。亀甲括弧内は引用者による補足である。なお, 作品名に続く丸括弧内の数字は原則として初出年を表している。
 - (5) 杉田英明『アラビアン・ナイトと日本人』岩波書店, 2012年, 399–402頁。
 - (6) 稲垣足穂「海港奇聞——内部「バグダッド」」(れんさい・めるへん〈1〉)『神戸っ子』1972年6月号, 28–29頁; 28頁。なお, 改稿癖で有名な足穂の作品には異稿が多く, 場合によってはその異同がかなり大きい, 以下, 本稿では原則として初出時のテキストから引用する。
 - (7) 稲垣足穂「神戸漫談」『文藝時代』(金星堂)2巻2号, 1925年, 54–56頁; 54頁。
 - (8) 稲垣足穂「キタ・マキニカリス——Biographically」『新潮』昭和22年5月号, 2–14頁; 5頁。
 - (9) 杉田英明『アラビアン・ナイトと日本人』, 399–402頁。
 - (10) 稲垣足穂「星を造る人(新童話)」『婦人公論』大正11年10月号, (創作)37–58頁; 「星を賣る店——A merry tale」『中央公論』大正12年7月号, 1–39頁。
 - (11) 『作家』169(昭和38年1月号)99–112頁; 105頁。
 - (12) 稲垣足穂「新月抄」『むらさき』4–13(昭和12年12月), 101–106頁。
 - (13) 拙稿「神戸モスク建立前史——昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」『日本・イスラーム関係のデータベース構築——戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』(平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書, 研究代表者:白杵陽[日本女子大学文学部]), 2008年, 21–62頁; 35頁。ここには「少なくとも昭和5(1930)年の時点で」と書いたが, もう一年ほど早くタートル人児童向けの教育は始められていたようである(Larisa Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia: Transformation of Consciousness: A Historical and Sociological Account Between 1898 and the 1950s*, Tokyo: Rakudasha, 2007, p. 214, note 184)。
 - (14) 稲垣足穂「新月挿話」『FANTASIA (Fantasia: 詩の本)』(上田屋書店)2輯, 1929年, 25–27頁。初出は同年3月の『クロネコ』第2号(1929)であるようだが, 筆者未見。
 - (15) そもそも, 当時の写真から判断すると, 神戸のタートル人学校(やモスク完成後はモスク併設の学校)には徽章や制服がなかったように見える。
 - (16) ここでニヤーズについて詳述する余裕はないが, とりあえず, 内務省警保局編『外事警察概況』昭和13(1938)年版, 208頁を参照。
 - (17) ただし, 1935年発行の『モスク落慶記念冊子』にもアフマディーヤに属するイギリス在住の人物の祝辞などが掲載されており, 詳細は未詳だが, 当初モスク建立に参加した在神ムスリムのなかに同派の信徒がいた可能性もある(拙稿「神戸モスク建立——昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」41(104)頁)。
 - (18) 『バグダッドの盗賊』に関しては, 杉田英明『アラビアン・ナイトと日本人』, 249–256頁を参照(足穂との関わりについても触れられている)。
 - (19) 島尾敏雄「亡命人」『群像』35巻第1号(1980年1月), 92–104頁; 95–96頁。
 - (20) 同上, 96頁。

- (21) 同上, 97頁。
- (22) 沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』成文社, 2007年, 16-19頁。
- (23) 島尾敏雄『昭和十四年日記』『幼年期——島尾敏雄初期作品集』弓立社, 1973年, 407-520頁から引用し, 頁のみを記す。
- (24) 島尾敏雄「あとがき」『日記抄』潮出版社, 1981年, 225-227頁; 226頁。
- (25) 島尾敏雄「鈴木正四「祖国の解放」」『島尾敏雄全集』第13巻, 晶文社, 1982年, 85-87頁(初出は『現在』昭和27年8月第2号)。
- (26) 草稿は「元代回鶻人の研究一節」上掲『幼年期』, 523-553頁。
- (27) 後出の『神戸』において三鬼は, 東京から逃走した理由を「私自身の阿呆さ加減にひどく腹を立てたからである」と述べている(西東三鬼『西東三鬼全句集』平畑静塔・三谷昭監修, 都市出版社, 1971年, 314頁)。しかし, 実際には実務的な事情も絡んでいた。三鬼自身が『俳愚伝』(1959-60)で述べているように, 当時取り引きしていた会社が姫路西郊に工場を作ることになり, その物資納入の仕事が(当初は)あったのである(『西東三鬼全句集』, 417頁)。同じことは当時の三鬼をよく知る俳人, 三橋敏雄(1920-2001)も述べているが, 彼によると, さらに別の事情もあったらしい。三鬼の長兄が, 弟の検挙の悪影響が係累に及ぶのを恐れ, 三鬼に対して「オレがおまえの家族の面倒を見るから, どっかへ行っちゃえ」というようなことを言ったという(津田清子ほか『証言・昭和の俳句』下, 角川選書, 2002年, 281-282頁)。
- (28) 初出はそれぞれ『俳句』昭和29年9月号-31年6月号, 『天狼』昭和34年8月号-12月号。
- (29) 小林恭二「解説——『神戸』の頃の三鬼」西東三鬼『神戸・続神戸・俳愚伝』講談社文芸文庫, 2000年, 267-278頁; 272-274頁。
- (30) 「葉山雑記」(初出:『天狼』昭和35年3月号-12月号)『西東三鬼全句集』, 565-590頁; 587頁。
- (31) 『神戸』「第九話」の冒頭, 『続神戸』「前説」(『西東三鬼全句集』, 314, 327頁)。
- (32) 小林恭二「解説——『神戸』の頃の三鬼」, 277頁。
- (33) たとえばのちに三鬼の妻となったきく枝夫人が「絹代」として登場する。
- (34) 神戸新聞文化部編『名作を歩く——ひょうごの近・現代文学』神戸新聞総合出版センター, 1995年, 15頁; 「西東三鬼・イン・ミステリアス神戸」『神戸新聞』(1993年5月30日付, 17面)。後者の新聞記事に関しては, 『MO・A・I—モアイ—』(神港学園神港高等学校図書館)第9号(特集:西東三鬼と神戸), 2000年に教えられた。
- (35) 三谷昭「ボヘミアン三鬼」西東三鬼『神戸・続神戸・俳愚伝』出帆社, 1976年, 333-356頁; 341頁。
- (36) 以下, 引用は前掲『西東三鬼全句集』から行い, 末尾に頁のみを記す。
- (37) 前掲註34の文献を参照。
- (38) 西東三鬼「豆自叙伝」(初出:『天狼』昭和25年7月)『西東三鬼読本』(『俳句』昭和55年4月臨時増刊)角川書店, 204-205頁; 205頁。
- (39) 『西東三鬼全句集』, 598頁。
- (40) 1938年から東京にもエジプト人が数名いるのは, その年の1月に在神戸のエジプト領事館が廃止され, 代わって東京にエジプト公使館ができたためであろう。拙稿「神戸モスク建立前史」, 47頁を参照。
- (41) 外務省記録K.3.7.0.15「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第四巻収録「在留外國人名簿」。この資料については, 拙稿「神戸モスク建立前史」の註70(54-55頁)を参照。
- (42) 筆者によるインタビュー(2005年6月16日, 神戸)。キルキー氏は1927(昭和2)年に名古屋で生まれ, 1937(昭和12)年ごろから神戸で育った。
- (43) 『西東三鬼全句集』, 582-583頁。ここではエルバ氏が「エルバ島」ではなく「コルシカ島」で生まれたことになっているが, いずれにせよ真偽は不明である。
- (44) なお, 『神戸』は(『続神戸』『俳愚伝』などと合わせて)1977年, NHKの「ドラマ人間模様」

- シリーズの一篇として『冬の桃』という題でドラマ化され(脚本:早坂暁,主演:小林桂樹,全7回),エルバ氏は「マジット・サレム」と名前を変えられた上で,実際にエジプト人バハー・ザグルール氏によって演じられた。
- (45) 『放浪記』に出てくる神戸の「トルコ人」については,拙稿「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(1)——東京・朝鮮篇」,85(262)頁を参照。
- (46) 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第18巻,中央公論社,1982年,319頁。
- (47) 前掲註16の文献を参照。
- (48) 『蓼喰ふ蟲』(1928-29)には,主人公である斯波要のなじみの女として,神戸山手の娼館にいるルイズという外国人娼婦が出てくる。本人いわく「波蘭土(ポーランド)の生れ」,「母親の方に土耳其人の血が交つてゐる」という。「栗色の斷髪に茶色の瞳をした種族」でありながら日本語を巧みに話し,肌は「白晳でない」が,「要を最初に惹きつけたものはその何處やらに濁りを含んだ淺黒い皮膚のつやであつた」。しかし,後で要がボーイから聞いたところでは,「ほんたうは朝鮮人と露西亞人との混血兒」で「彼女の母は今でも京城に住んで」いるという(谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第12巻,中央公論社,1982年,147-149頁)。
- (49) 『遠藤周作文学全集』第6巻(短篇小説I),新潮社,1999年,110頁。
- (50) 柏木薫・志村有弘・久坂葉子研究会編『神戸残照 久坂葉子』勉誠出版,2006年,449頁(444頁の年譜も参照)。久坂は相愛女子専門学校の音楽部ピアノ科にいたことがある。
- (51) 小石忠男「回想・久坂葉子」『久坂葉子研究』Vol.3(没後五十年記念号),2003年,43-47頁;43-44頁。久坂葉子(川崎澄子)は神戸川崎財閥の系譜につらなる家の生まれで,父は川崎重工専務取締役,父方の曾祖父は川崎造船所の創設者(川崎正藏)だった。
- (52) 前掲の沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』を参照。
- (53) 富士正晴『贗・久坂葉子伝』筑摩書房,1956年,14頁。
- (54) 柏木薫「その日の久坂葉子」『神戸残照 久坂葉子』3-16頁;10頁。
- (55) 「古蘭よ」『久坂葉子全集』第3巻(戯曲・詩・俳句・日記),佐藤和夫編,鼎書房,2003年,206-207頁。「古蘭」は,作中の語り手が陶器類を日本に持ち帰らせるため朝鮮に送り出す娘の名前として出てくる。おそらく久坂の「柳河の人」(1952)で言及されている朝鮮からの引揚者である「某工芸家」のエピソードと関連があるのだろう(『久坂葉子全集』2巻,2003年,299頁を参照)。
- (56) 『久坂葉子全集』第3巻,201-202頁。
- (57) 同上,284-285頁。
- (58) 同上,287頁。
- (59) 拙稿「神戸モスク建立前史」など。
- (客員研究員 大阪大学言語文化研究科講師)